



Title	関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第9弾 「わたしの健康、わたしの権利」第2回：紛争・戦争と健康権
Author(s)	高橋, 愛貴
Citation	目で見るWHO. 2025, 92, p. 28-31
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102314">https://doi.org/10.18910/102314</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第9弾 「わたしの健康、わたしの権利」 第2回：紛争・戦争と健康権



聖路加国際大学 公衆衛生大学院 専門職学位課程

高橋 愛貴 (たかはしあき)

国立国際医療センター救急科、厚労省勤務後、2017年～東京都公衆衛生医師。保健所で結核・感染症対策、精神保健に従事。KGHの集い実行委員。

2024年11月21日に第2回「紛争・戦争と健康権」というテーマでオンラインセミナーを開催しました。話題提供者として、安藤恒平さん（赤十字国際委員会（ICRC）医師）、清田明宏さん（国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）保健局長）をお迎えしました。進行は安田直史さん（近畿大学社会連携推進センター教授、日本WHO協会理事）、特別パネリストは中村安秀さん（日本WHO協会理事長）でした。

ICRCの外傷外科医として2023年12月から4度にわたりガザ内の赤十字野外病院等で勤務された安藤さん、そして2010年にUNRWAの保健局長に就任されて以降14年間にわたりガザを含むパレスチナ人難民に対する公衆衛生・医療支援を提供し続けておられる清田さんから、多くの写真や映像とともに、現地の状況と活動についてお話しくださいました。セミナー参加者は300人を超える、ガザの状況について知り、健康、命、人権、そして平和について深く考える大変有意義な機会となりました。

赤十字国際委員会  
安藤恒平さん

まず安藤さんから、ガザの人々の状況とICRCの活動についてお話しいただきました。大きく破壊された建物や、生活の場が破壊され人々がテントでの生活を余儀なくされている状況等を多くの写真

と共に伝えくださいました（写真1）。また、ICRCのガザにおける活動についてご紹介いただきました。ICRCは医療活動だけではなく、命をつなぐための緊急物資の提供や、移動のためのバスの手配など、紛争の被害にあった方々を多方面から支援しています。ICRCの活動場所では、屋上などに赤十字を明示したフラッグを設置し（写真2）、また常に紛争当事者双方とコミュニケーションを行い、活動地域の安全を確保しています。

3度の活動時に安藤さんが勤務された、ICRCが支援するヨーロピアンガザホスピタルの救急外来（ER）と病棟の状況をお話しくださいました。多数傷病者が発生した際にはERに多くの患者が搬送され、騒然とした状況になります。必要時には、安藤さんが麻酔科医とチームを組んでERで患者の状況を把握し、すぐに手術が必要な方を手術室に直接搬送されました。病棟は新型コロナ対応の際に建てられたプレハブで構造が脆弱なため、近くで空爆があった際に大きな音と衝撃波を感じたとのことです。これにより天井が落ちたこともありましたが、幸い安藤さんの勤務中には怪我をされた方はいなかったとのことでした。このような状況下で、医療スタッフ自身も安全を確保しながら医療活動を進めることの過酷さと同時に、信念をもって対応する覚悟を、安藤さんの言葉から感じました。

4回目の活動時に勤務された赤十字野

外病院（Red Cross Field Hospital）（写真3）についてお話しくださいました。病院はテントで構成され、全体で60名の入院患者の収容が可能ですが、常時9割のベッドが使用されていました。手術室は2室あり（写真4）、日本から多くの手術器材が輸送されていました。一般外来では1日300～400人の受診があり、安藤さんはここで週1回外傷後のフォローを行いました。ERでは直接搬送と、他の病院からの転院搬送の両方を受け入れています。Field Hospitalは2024年5月にオープンした比較的新しい施設であり、医療資材が供給されることから重傷者の対応が可能であり、病院間連携により多くの転送を受け入れていました。院内には外来・病棟の他、レントゲン、検査室、薬剤倉庫、靈安室、浄水装置・貯水槽、休憩室、トイレ、ゴミ集積所などが整備されています。器材が不足した際には、松葉杖や牽引台などを技師が手作りで作成していました。また、MHPSS（Mental Health and Psychosocial Support、精神保健および心理社会的支援）を早期から実施し、うつ病やPTSDへ対応されています。Field Hospitalの写真から、質の高い医療提供への不断の努力、安全な療養環境の維持、管理された病院運営を見ることができ、ICRCの技術力・組織力に心からの信頼を感じました。

Field Hospitalでの1か月間の勤務に

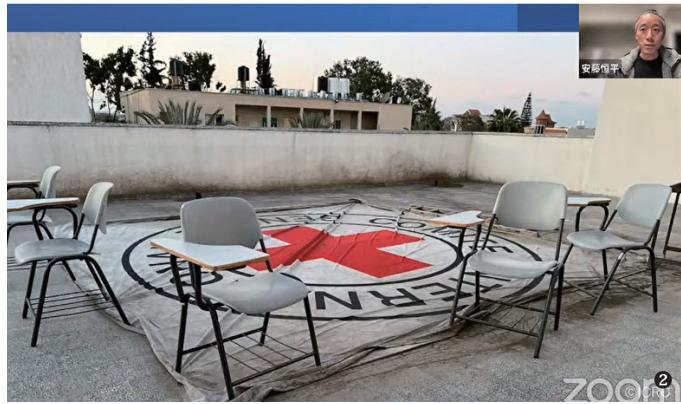


Red Cross Field Hospital

Rafah, the Gaza Strip



①写真1 安藤さん発表スライドより（建物が大きく破壊されているガザの風景）②写真2 安藤さん発表スライドより（病院屋上に設置されたICRCのフラッグ）  
③写真3 安藤さん発表スライドより（Red Cross Field Hospitalの全景）④写真4 安藤さん発表スライドより（Red Cross Field Hospitalの手術室）



Operating theatres

おいて、安藤さんは138名の処置・手術を担当され、腹部・胸部損傷や数多くの開放骨折の手術の執刀をされました。お話を聞きしながら、資材の確保に制約がある中、多国籍のメンバーと共に、全身の臓器に対応する外傷外科医として重傷者の治療にあたることの重責を強く感じました。そして、安藤さんの、困難な状況で対応する胆力、豊富な経験、高度な医療技術に、深い感銘を受けました。

### 国連パレスチナ難民救済事業機関 清田明宏さん

次に、清田さんから、ガザの人々の状況、ポリオワクチン一斉接種の指揮を取られたご経験を含め UNRWA のガザに

おける活動についてお話しくださいました。最初のメッセージとして、「ガザの危機は人災である」とお伝えくださいました。「今起こっていることは本当に未曾有の危機ですが、防ぐことができ、止めることのできる危機です」と清田さんはセミナー参加者へ語りかけました。

今回のガザにおける危機以前、2021年海沿いのガザの風景には、非常に綺麗な街並みがありました（写真5）。ガザではもともと人々の強い連携があり、医療システムも機能していました。予防接種の接種率は100%を達成し、ポリオも20年以上発生が見られていませんでした。しかし、2023年10月7日以降、事態は急変しました。もとの街並みは跡形もなくなり（写真6）、戦闘により人

口の約2%が死亡しています。国連人道問題調整事務所（OCHA）によると、これまでにイスラエル側からの避難指示が87%の地域に出ています。避難勧告のたびに人々は移動を余儀なくされています。海岸沿いの地域にはテントが密集し、衛生状態や居住環境が悪い状況です。町の上下水道は損壊し、衛生状態の悪化により水系感染症であるA型肝炎やポリオの感染が発生しました。戦闘開始後、ガザ内には多くのゴミの山が発生し、ここに多くの家族が袋を持って何か使えないものがないか探しに来ています。これは、これまで長くガザと関わってきた清田さんが一度も見たことがない光景であり、「『人間の尊厳が崩壊している』というのが率直な感想です」と話されました。



写真5 清田さん発表スライドより（ガザの海沿いの風景：2021年）



写真6 清田さん発表スライドより（ガザの海沿いの風景：2024年）

続いて UNRWA のガザにおける活動についてお話しくださいました。ガザの人口 220 万人の保健医療を支える UNRWA は、22 の診療所を運営していました。電子カルテや電子母子手帳が導入され、年間 300 ~ 400 万人に対応する外来を有し、糖尿病と高血圧を合わせて 10 万人の患者、3 万 5 千人の妊婦のフォローを行っていました。10 月 7 日以降に治安状態が悪化し、運営できるのは 6 か所の診療所のみとなりました。

一方で、避難所に多くの人が集まるため対応が必要となり、避難所で臨時診療所が設置されました。UNRWA 現地職

員の活躍により、10 月末にはほぼ以前と同様の 1 日あたり 1 万 5000 人に対応できるようになりました（図 1）。2023 年 9 月から 2024 年 10 月までに総計 620 万人の外来患者、ガザの一次医療の 5 割に相当する数が UNRWA の診療所で対応されました。これは UNRWA の貢献の大きさと人々のニーズに懸命に応えている現地スタッフの働きを示す数字であるといえます。WHO の 11 月 13 日時点の situation report では、死者が約 4 万 3 千人、負傷者が約 10 万人、がれきの下等での死亡未確認者が 1 万人以上と推定されています。

毎月 100 人前後しか救命のためガザ外の治療施設へ搬出できない状況であり、待機患者数は 1 万人超とのことです。

このように非常に困難な状況下で、ポリオワクチンの一斉接種が実施されました（写真 7）。接種初日から多くの人が接種を受けにきました。清田さんは多くの子供が着飾っていることに気づき、ある親に聞いたところ、「戦争が始まってから空爆の恐がなく家族で外出するのは初めてだから」との言葉でした。清田さんは、「予防接種は感染予防に寄与するとともに、人々の心の平穏に少しでもつながっていることを感じた。しかし同時に、そういうことを言わせている厳しい状況があることも感じた」とお話し下さいました。多くの親が、ポリオワクチンは麻痺を予防する効果があることを知っており、接種させるのは親の役目だと認識していました。そして、親はみな「子供を守りたい、そしてとにかく早く戦争が終わってほしい」と言っていた、と清田さんは話されました。ポリオワクチン一斉接種は、WHO・UNICEF・UNRWA・保健省の緊密なパートナーシップのもと実施されました。多くの UNRWA 職員がこの困難な事業を支えました。

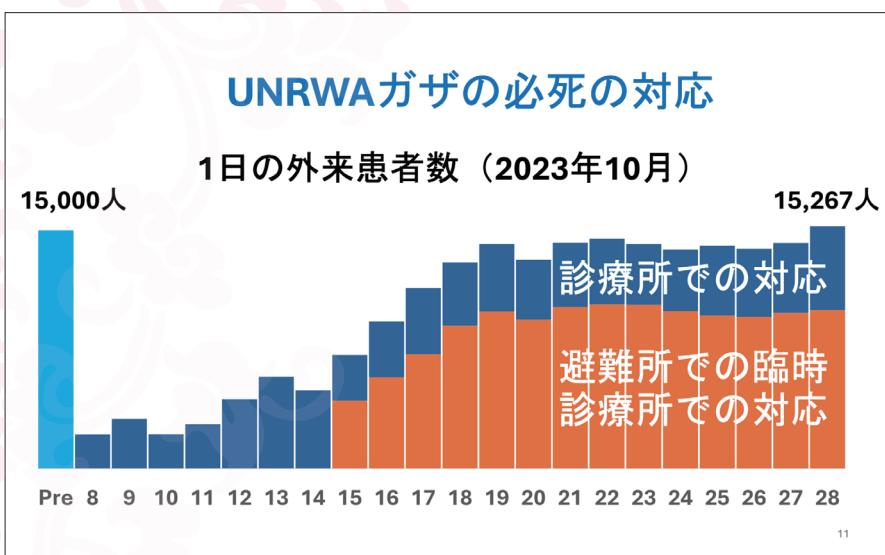


図1 清田さん発表スライドより（UNRWAが運営する診療所の1日の外来患者数）

最後に、清田さんは、空爆で負傷し膝上切断を余儀なくされた男性についてお話をくださいました。清田さんは、カタールのドーハで治療を受けた彼に再会しました。ガザで受傷後、打ちひしがれて将来を悲観していた彼は、治療後ドーハで「俺は元気だ」「ガザに帰って仕事をする」と言い、車いすの上で体を手で持ち上げるほどエネルギーに満ちていました。彼の姿を見て、清田さんは、「今のガザは未来の希望を失っているように見えるが、やはり希望は人々の心の中にあります」と話されました。「どんなに希望が見えないような場所でも、それは個々の人の心の中で育つ。そして希望こそが回復の原動力になります。人々の心にある希望を育てるということは、今一番大事だと思っています」と話されました。清田さんは、UNRWAは非常に厳しい状況に直面しているが、とにかく諦めずに、国連総会で決議されたUNRWAの任務を実行することに誇りを持って続けていきます、と力強くおっしゃいました。清田さんの、UNRWA職員への深い信頼、UNRWAがガザで果たしている役割への誇り、そしてガザの人々の未来を想う心に、強く尊敬の念を感じました。(清田さんのご講演の動画は以下のURL/QRコードからご覧いただけます。)

未曾有の苦難に直面しているガザで、常に熱意に満ち、かつ冷静にプロフェッショナルとして全力を尽くすお二人の姿に、多くの気づきと希望を与えられたセミナーとなりました。

清田氏の動画はこちらから

<https://japan-who.or.jp/about-us/notice/2412-22/>



写真7 清田さん発表スライドより（ガザのポリオワクチン一斉接種）



写真8 清田さん発表スライドより（ヨーロピアンガザホスピタルでの清田さんと安藤さん）



写真9 11月21日オンラインセミナーの様子（登壇者と運営委員）